
平成 28 年度の博物館館園実習・見学実習について

九州保健福祉大学学芸員養成課程

平成 28 年度の博物館館園実習(学外実習)では、7 名の実習生(4 年次生対象)が各館園での実習に参加している。内訳は、下記の通りである(五十音順)。

到津の森公園 1 名
大分県立先哲史料館 1 名
堺市博物館 1 名
佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 1 名
太宰府市文化ふれあい館 1 名
宮崎市フェニックス自然動物園 2 名

本年度は総合博物館・美術館の併設館 1 名、歴史・考古学系博物館 3 名、動物園・水族館 3 名という動向であった。博物館実習において実習生を受け入れて頂いた各館園には、ここで感謝の意を表したい

また、見学実習(3 年次生対象)については、10 月 15 日に宮崎県総合博物館・宮崎県立西都原考古博物館にて実施した。参加学生は 16 名であった。例年ではあるが、見学実習は博物館のリアルな舞台裏を受講生が初めて観る機会であって、この実習で受けるインパクトは極めて大きなものである事を本年度も確認している。

案内頂いた両博物館の担当者には、改めて感謝したい。

太宰府市文化ふれあい館 (福岡県 太宰府市)

実習期間：平成 28 年 7 月 20 日～ 8 月 2 日

薬学部 動物生命薬科学科 4 年

伊見 詩織

太宰府市文化ふれあい館は大宰府政庁跡や観世音寺、大野城跡、水城跡などを結ぶ「歴史の散歩道」の中該施設として平成 8 年 4 月 27 日に誕生した。「太宰府の歴史や文化」をテーマとした学習の機会を提供することを主とし、考古・歴史・民俗・美術など各分野の展覧会の開催、太宰府の地域性を活かした講座の開講などを展開している博物館類似施設である。

私はこの太宰府市文化ふれあい館にて、7 月 20 日から、8 月 2 日までの土曜日・日曜日を除いた 8 日間実習に参加させて頂いた。実習生は私を含め 4 人で、時間割によって担当分野の学芸員さんや文化財課の方から教わるというかたちであった。

1 日目はふれあい館の機能や役割についての講座、最終日に提出の課題についての説明、館内見学や実際に巻物や掛け軸などの資料を取り扱う方法を学んだ。課題は、実習生 4 人で「歴史の散歩道」のガイドブックを作るというものであった。①それぞれがコースの一部を担当、②協議しながら内容を検討する、③統一感にも配慮する、という 3 つの注意点が言い渡された。課題は館にある資料を使用してもよく、学芸員さんに相談しながら実習の合間に作製していくこととなった。

2 日目はこの時期開催されていた、展覧会『歴史の散歩道』展の撤収作業と特別収蔵庫の見学をさせて頂いた。特別収蔵庫とは、紙物や木製などの湿度や気温、虫の影響を受けやすい資料を保管している収蔵庫である。撤収作業については、1 日目に行った巻物・掛け軸の取り扱いが活きたのだが、自分の身長をはるかに上回る掛け軸などは脚立を使用しながら下から上へ巻いていく作業であったため、左右に込める力が平等にならずにタケノコ状の三角錐になってしまったりと非常に難しかった。他にも、展示ケース内の天井の清掃も高い脚立に登っての作業であったため、少しバランスを崩せば後ろに倒れてしまう恐怖と戦っていた。この 1 日は神経をすり減らした。

3 日目は、午前中に「日本の文化財保護法行政法の歴史・文化財保護の意義」についての講座を受け、午後から史跡踏査として文化財課の方の車に乗せて頂き「歴史の散歩道」を案内して頂いた。講座では、今身の回りにある物が 100 年後には貴重な資料になる可能性があることに感慨深くなり、史跡踏査では文化財課の方の分かりやすい解説により私の地元がとても歴史ある場所であることを知って驚いた。

4 日目は、埋蔵文化財の調査実習として同じ太宰府市にある榎社に集合した。榎社とは、太宰府天満宮境内飛地にある神社で、菅原道真が太宰府市に左遷されてから逝去するまで居住(謫居)した跡である。午前中は、発掘調査を行う目的や掘り起こす際の道具について説明して頂き、実際に土の山を掘った。午後は、

発掘した土器や瓦の破片を新旧に分別したり、作業員さんの掘った土を山に運ぶ手伝いなどをした。正直、当時の土器などがこんな簡単に掘り起こして出てくるものなのか、と驚いた。

5日目は、8月から開催される展覧会『まると太宰府歴史展 2016』の展示作業と、必要な資料の借用に立ち会った。午前中は梱包されたパネルを開けワイヤーに吊るす作業で終了。午後から二手に分かれ、一方は九州歴史資料館と基山町役場、一方は太宰府市公文書館にそれぞれ引率して頂いた。私は九州歴史資料館と基山町役場に同行し、資料借用に当たっての確認や写真撮影、運搬をさせて頂いたのだが、1つの資料を借りるのにファイル2・3冊分にもなる書類が必要になることを教わると資料の重みが増した。

6日目は1日かけて『まると太宰府歴史展 2016』の展示作業を行ったのだが、あまりの集中に実習史上最も時間が経つのが早かった。内容は、図面に合わせて解説パネル・演説台を展示ケース内に設置するものであったが、言葉では簡単で、なんとパネルをピンで設置する作業に20分もかかっていた。mm単位で設置する場所が決まっており、集中力が切れ少しでもずれてしまうと、メジャーで測ってくれている他の実習生に迷惑をかけてしまっていたので慣れるまでは大変だった。この作業を一人で、かつ数分で終わらせる学芸員さんの技術は見事であった。

7日目も引き続き歴史展の展示作業であった。パネル設置は完了していたので、この日は演説台に資料を設置していった。どの角度が一番資料の魅力が伝わるか、また、資料同士が角度によって重なって見えたりキャプションと重なったりする部分はどうすればよいのかなどを他の実習生たちと考えながら作業を行った。地道で難しい部分もあったが、納得のいく設置ができるとその分嬉しさもあり、自分がこれから展示会に行ったとき、見せ方の工夫から展示制作者の思いを感じることができたらな、と思った。

8日目は体験学習講座実習として、箱カメラの作り方と使い方を小学生に教える講座に参加させて頂いた。普段接することのない小学生に対していかにして分かりやすく説明するか、集中が途切れてしまった子に対する注意の仕方、手伝ってあげたことにより自分の手が加わってしまう責任など、短い時間の中であらゆることを考えた。学芸員さんたちの、資料だけでなく、大人(ヨガ教室なども開催されている)から子供までを相手にするその体力面と精神面の大変さを痛感した1日であった。

8月1・2日は大学での試験があったため欠席させて頂いたが、この8日間だけでも本当に充実した内容で、大変なことももちろんあったが、学芸員さんのお仕事の魅力、そして楽しさを感じることができた。1つの展示にかける思い、それに伴って必要になってくる各機関の協力、展示ができあがった感動。この実習なしでは分からなかったものがたくさんある。

これから社会に出て、様々なことを経験するうえで今回の実習で学んだことを活かしていきたい。

宮崎市フェニックス自然動物園 (宮崎県宮崎市)

実習期間：平成 28 年 8 月 8 日～ 12 日

薬学部 動物生命薬科学科 4 年

小林 ゆう美

宮崎市フェニックス自然動物園は宮崎県に唯一ある動物園で、私を含んだ 3 人で 5 日間の日程での実習を行った (他大学 1 名)。実習課題は特になく、打ち合わせで頂いた資料を読んでおく位だった。実習時にやりたい事があれば、事前に担当者と打ち合わせをし、準備をすれば行えるようになっている。2 週間前には実習時に着る服 (動きやすいズボン・シャツ× 3、タオル× 3、靴下× 3、軍手× 3、帽子) を熱消毒してもらうために持って行った (郵送可)。

私の実習期間は小学校が夏休みということもあり、サマースクールという企画を行っていた。サマースクールとは夏休みの小学生を対象とした飼育実習で、午前中は動物の世話や掃除など、午後は勉強会や水泳などの体験を行い、子供達に「動物に興味を持ってもらう」また、「他校の友達をつくってもらう」といったことを目的としている。実習生はサマースクールで動物について学び、楽しく遊んでいる子供達が 1 日怪我や事故などがないように誘導する。実習の初日・2 日目はサマースクールの誘導、3～5 日目は飼育実習を行った。

サマースクールでは 1 日に参加する子供達は約 100 人おり、1 班 20 人ほどの班が 5 つに別れて行動する。班の種類は 1 年生から 3 年生を対象としたウサギ班・カメ班・ロバ班、4 年生から 6 年生を対象にしたラマ班・キリン班にそれぞれ担当者が 1 人付いて構成されていた。

サマースクール実習の 1 日の流れは、朝 7 時 45 分に動物園の入口に着替えて集合、8 時に受付を開始、参加者がある程度集まったら開校式がある場所まで誘導する。そして子供達が揃って整列してから開校式という流れであった。私が担当したロバ班の子供達にも並んでもらって移動した。9 時からロバ舎の掃除とエサやりをして、10 時ぐらいからボリビアリスザルのエサを切り、給餌の見学と観察をした。エサを切るのに包丁を使うので、子供達が手を切ったり暴れたりしないように目を配っていた。10 時 30 分ぐらいにボールニシキヘビとのふれあい、班ごとの記念撮影をして、11 時に早めの昼食をとり、12 時から「絶滅危惧種や希少動物について」の勉強会を行った。午後に入って 13 時からプールで子供達の水泳の監視や遊び相手をした。水泳が終わると 14 時 30 分に終了式を行い、入口まで誘導して子供達全員が親と帰ったのを確認する。その後は各場所の忘れ物のチェックと片付け、次の日の名札やテキストの準備、子供達が使った水泳キャップの洗濯をして 16 時すぎに実習終了というものだった。

サマースクール実習では子供を対象としたものだったので、1 日中周りに気を配っていて大変だったが、職員として子供との接し方を学ぶことができるいい機会になった。子供達に飼育の大変さや動物について学んでもらうのが目的だが、やはり子供達の安全が 1 番大切で、常に周りに目を配り、人数確認をす

ることを心掛けた。また、今回の実習では多くのことを学ばせて頂いた。その中の1つが子供達との接し方で、飼育員の方達はサマースクールを毎年経験していることもあって慣れており、どんな話に興味を持つのか、好きなキャラクターやタレントについてなど詳しく知っていた。そのため子供達とすぐに打ち解け人気者になっているようだった。特に子供達が興味を持って聞いていた話は、飼育員だからこそ知っている、調べても資料に載っていないであろう動物に関する豆知識についてだった。テキストに載っていることよりも覚えていて、サマースクールが終わってそのことを自慢げに親に話している子供達が何人もいたのが印象的だった。

飼育実習では区ごとに飼育動物が別れていて、私はこども村区・南区・フラミンゴ区をそれぞれ1日ずつ担当した。どれも朝の8時45分にはミーティング室に集まって飼育動物の状況、連絡事項の報告を行い、9時過ぎには解散し持ち場についていた。

こども村区ではヤギやロバ舎の掃除を午前中に行い、10時にあるイベント「ヤギの大作進」の手伝いをした。その際ヤギが怪我していないかのチェックを行い、通路が汚れたら掃除をした。午後はヒヨコ・モルモット・ウサギ・モグラ・リスザルなどのエサ作りと給餌を行った。また、お客様に販売している動物のエサがなくなっていないかのチェックと補充をし、16時の「ヤギの大作進」の手伝い、飼育舎の掃除をした。

南区ではワラビー・クジャクなどの飼育舎の掃除を午前中に行い、午後はこれらの動物のエサ作りと給餌をした。13時30分にあるイベント「ゾウさんのお散歩と記念撮影」では、ゾウにお客様が近づき過ぎないようにしたり、記念撮影の誘導を行ったりした。

フラミンゴ区では、繁殖舎のフラミンゴのエサ作りをしてから掃除と給餌を午前中に行い、午後はミーアキャット・インコ等のエサ作りと給餌をした。11時30分・13時・15時にはイベント「フラミンゴショー」でのお客様の誘導と来場者数の確認。13時30分にはイベント「インコのふれあい」でお客様に触り方や終わったら手を洗うなどの誘導を行った。

飼育実習は動物のお世話がほとんどだったが、イベントでお客様と接する機会も沢山あったので、飼育員は動物のことを良く知っているだけでなくコミュニケーション能力も大切なだと学ぶことができた。また、環境や衛生面も考えていて、糞を肥料にする取り組みや、使った道具の消毒も行っているのがわかった。

イベントでは、どうしたらお客様の興味が引けるのか、さらに動物本来の素晴らしい能力を見せる方法などが、園内で試行錯誤されてきたのが良くわかった。ふれあいイベントでは、動物にただ触ってもらうのではなく、どこに棲息していてどんな性格なのかなどの説明をしながらお客様の安全を確保し、動物のストレスや体調にも考慮していた。無理して外に出させることは無く、飼育舎に戻す時はお客様に説明し理解してもらっていた。また、お客様にも無理に

動物に触ってもらうものではなく、子供には「あいさつしてみようか」「今度来た時に撫でてあげてね」など、優しく声をかけていた。せつかく来たのだから無理に触ってもらおうとするのではなく、楽しい気持ちでまた来たいと思ってほしいという配慮がされていた。

今回の実習では非常に多くのことを経験し、学ぶことができた。動物への配慮やお客様への心づかいは、日常生活でも見習ってできることがあると思う。今後、この経験を日常生活や社会の中、特に動物と接する職業において活かしていきたい。

佐賀県立美術館・博物館 (佐賀県 佐賀市)

実習期間：平成 28 年 7 月 25 ～ 29 日、8 月 3 ～ 5 日

薬学部 動物生命薬科学科 4 年

末次 由樹

私は今回、佐賀県立美術館・博物館において、8 日間の博物館実習に参加した。この博物館は、1983 年に博物館と美術館が通路で隣接され、2 つの館で一体運営されている。博物館では、主に佐賀県の歴史と文化をテーマに自然史・考古・歴史・美術・工芸・民俗の各分野の資料を常設展示している。美術館では、主に佐賀県にゆかりのある近・現代の絵画・彫刻・工芸などの資料を展示・紹介している。また、演奏会や講演会のためのホール、グループ展などのための画廊を備えているため、イベントも多く行われている。

実習は事前に届けられる実習スケジュールにそって行われた。1 日のスケジュールは、午前に講義、午後は実務実習のパターンと、1 日中実務実習のパターンがあった。実習後の夕方は、それぞれ課題作成のための資料集めの時間にあてられた。

初日は、学芸員の方々との開講式があり、その後オリエンテーションが行われて館の歴史やマネジメントの講義をして頂いた。午後からは館内やバックヤードを直接案内しながら紹介くださり、貴重な絵画展の設営準備現場や撮影室、書庫、収蔵庫を見せてもらった。絵画を展示する際には、光の反射によって絵画の魅力が変わることからあまり光を反射させない低反射アクリル板を使って展示する工夫が印象に残った。

2 日目は、午前に佐賀で活躍した近代美術家、仏像彫刻の見分け方についての講義があった。仏像彫刻は、その年代によって服の彫り方や髪が生え際が違うので、そこを見分けないといけなかった。いざ見分けようとするが素人の私にはまだ難しく、学芸員の方は当たり前のように年代を当てられていたので、プロの目の凄さに圧倒された。午後は、掛け軸を使って資料の取り扱い方、またその資料の読み取り方を学んだ。レプリカではなく、普段はガラスの向こうにある本物の掛け軸を使っての実践だったので、緊張した。

3 日目は、午前に指定管理者制度についての講義があった。指定管理者制度は、

地方自治体が所管する公共の施設について、管理、運営を民間事業会社・法人やその他の団体に委託することができる制度であり、佐賀県内にある、数箇所の博物館も取り入れている。導入することによって信頼・信用、サービスの向上につながるメリットもあれば、利用者が予想と大きくずれた場合の経費不足になるデメリットもある。多くの試練があって、それを乗り越えて指定管理者制度は成り立っていくことを知った。午後は、厚紙やアルミ板などを使って簡単に作ることが出来るピンホールカメラを制作した。後日、実際に撮影すると聞き、楽しく作成した。

4日目は、午前美術・工芸品の見方について正倉院の宝物を例に講義があった。どんな資料があるかだけでなく、年代、色、大きさ、材質の特徴も教えてもらった。宝物の中でも有名な琵琶に描かれている絵は、西洋の遠近法とは違い、色の濃淡で空気感を出した「空気遠近法」という技法が使われている。中国は昔から芸術の力がアジアの中でも上だったのだと改めて思った。午後は、博物館の南側にある茶室に行った。実際に茶会や茶道の研修会などに利用されている閑静なたたずまいの中で、茶の道に安らぎを求めることができる場所である。茶室から見える堀を舟で散策、蓮の葉を使ったお茶飲みなど貴重な体験をさせていただいた。

5日目は、午前毎年夏休みに行われるこどもミュージアム体験教室の一つである化石クリーニングのボランティアスタッフをした。久しぶりに多くの子供と触れ合ったが、夏の暑い中、子供はエネルギー満ちであった。化石クリーニングをする前に学芸員の方が佐賀県でよく発掘される場所やどんなものが化石になるのかを子供たちに説明されていた。話は非常に分かりやすく、専門的な用語を使わず子供にも理解しやすい言葉を巧みに使って楽しく盛り上がるトーク術を披露されていた。化石クリーニングの最中は常に子供に目を配らせ、手持ち無沙汰にならないように、仕事を探すことを心がけた。午後は、前に作ったピンホールカメラを使って撮影をした。それぞれ好きな場所で撮り、ネガ作りまでをした。あまり日光がありすぎると全体的に真っ白になってしまうので上手く木影を選び、撮影時間、カメラとの距離によって濃淡の違いが出てくるのでその点にも気をつけながら撮影をした。

6日目は、全国で最も有名な遺跡の一つ、吉野ヶ里歴史公園に行った。吉野ヶ里歴史公園は、日本最大級の規模の弥生時代の環壕集落跡であり、多数の住居跡、高床倉庫群跡、3,000基を超える甕棺墓、弥生時代の王族の墓である墳丘墓などが発掘されている。午前は実際に行われている土器の復元作業体験や銅鏡作りイベントを体験した。土器の復元作業は、パズルのピースのように組み立てるのが難しく、文様や土器の曲線に合わせてつなげていった。作業員の方は、破片すべてを図に書き、記録しながら組み立てていく。人が入れるサイズの甕棺は長い時間をかけて組み立てていると聞いて根気と精度のいる仕事だと思った。午後は施設見学をし、園内にあるレプリカではない本物の甕棺のある遺跡の施設に入った。比較的新しい建物で、弥生時代には既にあった身分の差によ

て埋葬のされ方、甕棺の大きさ・場所の違いについて理解することができた。

7日目は、1日、子どもミュージアム体験教室のボランティアスタッフをした。前回とは違い、当日の参加人数確認、イベント会場設営、スタッフの役割決め、子供たちに直接指導、会場片付けなど自分たち



写真：子どもミュージアムにて

で考えながら行動するようにした。勾玉作り教室と折り紙教室を手伝い、子供たちに直接教えた。教える際、“削る”や“直角”という言葉が分からない子がいてその子に対してどのような言葉で説明すればいいのか考えた。結果、“減らす”や“角を作る”という言葉で説明をしたが、もっと分かりやすい言葉があったと思う。子供と触れ合うことで普段当たり前のように使っている言葉や行動をどう上手く伝えるかが難しいと感じた。

最終日は、課題作成の発表をした。課題内容は、QRコードを活用した展示解説である。博物館(常設展示)・美術館(館内彫刻)の中から資料を1つ選び、館内にある資料室を使って、情報集めをする。その際、インターネットは使用不可である。パソコンを使って文章を作成し、解説ページに貼り付ける画像も自分で撮影をしなければいけない。私はカワセミの剥製資料を選んだ。カワセミについて生息地や身体の特徴などを調べ、特に魚の捕まえ方、美しい羽のことを重点に作成した。実習生が作成した展示解説は実際に博物館で使用されるそうだ。

この実習を通して、講義や実務実習を多く経験させてもらい、仲間との協調、連携の大切さ、常に来館者のことを考え、工夫を凝らし楽しませることや体力、根気がいる仕事だということを知った。そして、「伝える力」がとても大切だと感じた。幅広い年齢層が訪れる博物館の中で学芸員の方々が説明しているところを何度も見たが、どの来館者も理解してうなずきながら楽しそうに聞いていた。「伝える力」にはそれを補う「膨大な知識」も必要である。実習する前は、学芸員は特定分野の専門家『スペシャリスト』だと思っていたが、実習した後は、学芸員は『スペシャリスト』でありつつ、一方で何にでも対応できる『ジェネラリスト』だと感じた。多くの能力が必要になってくる学芸員という仕事を知り・その一端を学ぶことができ、これからの将来に活かしていこうと思う。

到津の森公園 (福岡県 北九州市)

実習期間：平成 28 年 8 月 17 日～ 8 月 30 日

薬学部 動物生命薬科学科

田庭 美優

1932年に九軌到津遊園地として開園し西日本鉄道が運営していた到津遊園地から、北九州市に運営が移行され、2002年には現在の到津の森公園となった。ここでは約100種、500の数の動物が飼育されている。

実習先に選んだ理由は、これまで先輩方の実習でも毎年受け入れてくださりとても指導が丁寧だということをお聞きしていたということと、幼いころからよく遊びに行っていて馴染みがあったからである。実習生は福岡の専門学生と獣医師の実習で来た大学生と私を含め3人で行なった。実習生には一人一人担当がつくので丁寧な指導を受けることができ、またわからないことがあっても質問しやすい環境が整えられている。はじめにふれあい(ヤギ、レッサーパンダ、モルモットなど)かサファリ(ライオン、ゾウ、キリンなど)のどちらがよいか聞かれ選んだ方の実習を受けることができた。動物が異なっても実習内容はほとんど変わらない。

私はふれあいの実習を行った。まず、初日は担当の方についてまわり動物舎の清掃を1日中行った。動物園はもちろん屋外で、大学に入ってからここまで体を動かすことがなかった私にとって正直とてもきつい作業だった。ここでは最終日に自分で選んだ動物の看板制作とイベント(お客さんの前でトーク)のどちらかを行うという課題があり、実習期間の早い段階でどちらを担当するかを決め、それに備えて準備を始める。私はイベントを選び、2日目以降は作業と同時並行でイベント作りを考えた。



写真：実習で飼育・トークを担当したレッサーパンダ

慣れない作業に加え今までしたことのないイベント企画の作成は精神的にも肉体的にも応え、家に帰ったころには疲れ果てていた。しかし、1週間も過ぎるときつかった作業にも慣れ、次にすることが分かっているので言われる前に自ら動き、褒められたときなどは今までやってきたことの成果が出ているようでとても嬉しかった。またイベントもだんだんと形になってきた。それまで自分が何を伝えたいのか、来園者の方が何を知りたがっているのか全く分からなかったが、担当者の方に「とにかく地道な観察が大事」「自分が初めに疑問に思ったことは来園者の疑問でもある」と的確なアドバイスと手取り足取り教えず自ら考えることの大切さを教えていただいた。

イベント当日、その日はとても緊張していたがそれを察してか担当者の方も他の職員の方々も作業は早めに切り上げ、イベントの練習時間をつくってくれた。そして、イベントが始まった。時間は15分で来園者の方にとってはそんなに長くはないが私にとっては1分1秒がとてもゆっくりと感じた。声は震え、練習した時よりも早口になっているのが自分でもわかるほどだったが、話し終えて挨拶をして頭をあげると来園者の方が全員拍手をしてくれた。そしてすべてを終え動物舎に入ると担当者の方から一言「上手だったよ!」と言われ、安堵と達成感が一気におしよせてきた。

ここでの実習は作業がとてもきつく、課題もあるため他の実習に比べると少し大変かもしれない。しかし、職員の方々の丁寧で熱心な指導と何より自分自身で一から考え、それを実行する経験をさせてもらえたことは、動物園や博物館で働く人、またそうでない人もいつか必ずその人の糧となると思う。ただ言われた作業をしてただらと実習を終わらせるのではなく、自分が何のために、何をしにここに来たのかをしっかりと考えさせてくれた実習だった。

大分県立先哲史料館 (大分県 大分市)

実習期間 8月22日～8月26日

薬学部 動物生命薬科学科
三重野 友美

大分県立先哲史料館は、大分県立図書館と大分県立公文書館との複合文化施設として1995年に設立された館である。大分県の先哲(昔の哲人・優れた人)をはじめ、歴史と文化に関する史料を調査研究し、先哲叢書の刊行などを行っている。

今回、私は平成28年8月22日から26日の5日間実習に参加した。事前課題などは特になく、配布された資料で先哲について少し学んでおいた。実習生は私を含めて3人であった。実習時間は9:00から17:00で、主な実習内容は大分の先哲についての講義と資料整理や展示業務の実務を行った。

実習のスケジュール

月日	内容
8月22日	オリエンテーション / 展示の見学 / 複製本調査 / 講義
8月23日	講義 / 資料整理の実務
8月24日	講義 / データ入力 / 展示の解説 / 資料整理
8月25日	展示業務
8月26日	データ入力 / 教育用冊子検討

1日目はオリエンテーションで史料館の歴史や仕事などを教えていただき、8月に行われていた展示の見学をさせてもらった。展示は『ペトロ岐部とキリシタン禁制』という内容で、キリスト教がどのように広まり、禁止されていったかがわかりとても勉強になった。その後、閲覧室にある複製本調査を行った。これはラベルを貼って分類するために、同じ種類の複製本が何冊あるか調べるという作業だった。古文書などの史料を常に一般公開することはできないため、写真を撮って複製本とし、閲覧できるようにしている。講義内容は田原淳についてであった。刺激伝導系を発見した人であり、この研究をもとに心臓ペースメーカーが生まれたということを知ることができた。

2日目は資料整理の実務について教えていただいた。史料から情報を読み取り、史料基本カードと封筒に記入するという作業で、記入する内容は表題・年代・法量・数量・形態などで、史料に書いてある情報を読み取らなければならず、昔の漢字が多くとても大変だった。損傷の激しい史料は紙に包んで保存し、「破損あり」や文字が欠けていたなどの細かい情報も備考欄に記入するので、カードを見ただけで史料の状態がわかるようになっていた。史料を読んでも日記やメモのようなものが多く、昔の人が何をしていたかがわかって面白かった。講義は塾を新設し指導を行い自然科学の研究や医学を教えたという帆足万里について、大分県にも生息するオオサンショウウオなどの天然記念物について、さらに日本における三大本草学者である賀来飛霞についての3つの内容だった。

3日目は資料データの整理を行った。史料基本カードに記入した情報をエクセルに入力するという作業で、先哲史料館では、カードとエクセルの2つで情報を管理しデータの紛失を防いでいる。資料整理やデータ入力は文字が読めなかったり、エクセル入力で昔の漢字が出てこなかったりとても大変だった。資料整理からデータの入力という流れを体験でき、学芸員の仕事を理解できた。

4日目は展示業務について学んだ。史料から情報を読み取ってみるという作業を体験した。「日本第一八幡宇佐宮境内略図」をみて、何が書いてあるか、気がついたこと、誰が、いつ、何のために作ったのかななどを観察した。墨のつきかたで判断したりもする。パネルには、テーマに合わせた情報を200字程度で書くので、100%の情報は書かれていないということがわかった。収蔵庫の中の静かな空間で史料を調べるという学芸員にしかできない貴重な体験ができた。史料を観察する時は視点が重要なので、「3人の目をもつ」ことを心がけるとよいと教えていただきとても参考になった。

5日目は教育用冊子検討ということで、インターンシップに来ていた実習生

が作った「玖珠町の歴史と先哲」というパンフレットについて、先哲史料館の学芸員を含めて全員で議論するというところを行った。対象者を誰にするかで文章やフォントなどを工夫しなければいけないのでとても大変な作業だと感じた。

歴史系の館であったが、意外にも自分が所属する学科に関係のある内容が多くて大変勉強になった。史料に触れるという貴重な経験や、実際の業務の一連を体験することができ、学芸員の苦労や楽しさを知ることができた。今回の実習で学んだことを、今後に生かしていきたいと思う。とても充実した実習であった。

宮崎市フェニックス自然動物園 (宮崎県 宮崎市)

実習期間：平成 28 年 8 月 8・9・10・11・12 日

薬学部 動物生命薬科学科

三宅 由利子

宮崎市フェニックス自然動物園は、動物園のみならず家族で楽しめる遊園地、小さな子供が楽しめる浅いプールや流れるプールも併設されており、一度で幾つもの楽しみ方ができる動物園である。1日3回行われるフライングフラミンゴショーや、ゾウの散歩など、独自のパフォーマンスを多く実施されており、来園者を如何に楽しませるか、動物の魅力を如何に伝えるか、というところに重きを置いている。

実習1日目・2日目はサマースクールの補助を行った。サマースクールとは、小学生を対象とした飼育体験学習であり、主に低学年班と高学年班に分かれ、担当動物の獣舎の掃除や餌の準備を行うものである。開会式では出口園長から子供達に向けて「動物を好きになる事」・「友達を作る事」が約束として述べられたが、本活動は飼育員体験という場だけではなく、新たな友達を作る、交流



写真1：絶滅危惧種についての話を聞く子供達



写真2：餌やりのパフォーマンスを見る来園者を深める場としての役割も担っている。

私が参加したのは低学年向けのロバ班と、高学年向けのキリン班であった。午前中は主に飼育体験の対象動物のための餌の準備を行ったのだが、ただ単に餌をやったり獣舎の掃除をしたりするだけでなく、飼育員や引率担当者が子供達に質問を投げかけ考えさせる場面が多くあった。「何故この餌をあげるのか」・「何故この様な餌の切り方をするのか」等の説明がなされると、子供達はその説明を熱心に聞きながら準備していたのが印象的だった。餌の形や質、与える時間や量、一つ一つに意味があり、それらを知ってから再度動物を見た時に、それまでただ一つの風景としてしか見られていなかった動物の食事の場面をあらためて興味を持って観察する事に繋がっていたのが理解できた。また、真夏に行われる体験学習ということもあり、必ず帽子の着用と水分を持参する様に事前に声かけがなされていた。園内を歩きながら飼育体験をする為、体調を崩す子供もいたが、こまめな水分補給を徹底する事、体調不良者が出た時の迅速な対応等、スタッフ全員で体調面や安全面の配慮がなされていた。

動物の世話をするだけでなく、地球上で発生している環境問題や絶滅危惧種の問題、さらには絶滅してしまいもう二度と見られない動物を紹介し、それら全ての原因は人間が作り出してしまっているのだという事を伝え、フェニックス自然動物園での体験学習を通して子供達が「環境」や「エコ」について考える時間が設けられており、博物館の役割の一つである「教育普及」の面を意識したプログラム構成になっていた様に感じた。

実習3日目からは飼育体験となり、私を合わせた実習生3名が、フラミンゴ区・南区・こども動物村を順番に1日ずつ実習させて頂く形で進められた。その中で最も印象に残っているのが、最終日のこども動物村での実習の際に、飼育員の方と話した内容であった。

フェニックス自然動物園では、動物との触れ合いや写真撮影などを通して動物を身近に感じられる工夫がなされている。市民や来園者に愛着を持ってもらえるような名前をつけたり、時に名前を公募したりと、言わばペットのような

気持ちで動物園動物を楽しんでいる。しかし動物園の役割の一つである「種の保存」という観点から見ると、時に淘汰が必要になる。愛情を持って飼育する事は大切だが、感染症に罹患した動物や、遺伝性疾患を持つ個体の遺伝子はその代で終わらせなければならない。そういった現実的に厳しい場面に直面した時に、「名前をつけて可愛がる事は果たして正しい飼育のあり方なのか？」という疑問を投げかけられ、私は答えを見つけられなかった。

生きている間はやはり、できる限りの愛情を持って飼育していく事が義務だとは思いますが、しかしそれは「可愛がる事」とは別物なのだと思います。撫でたり愛でたりする事だけが愛情とイコールでは無い時がある。野生動物としての居心地の良い環境を整える事も愛情であり、敢えて人間に慣れさせない事も動物園動物にとっては愛情になる事もある。

飼育員それぞれの飼育や動物に対する考え方は、価値観や性格によって何を正しいとするかは異なる事があり、どれが正解だということも無いのかも知れないが、そういった議論を飼育員同士が行う事の大切さ、互いの考え方を共有する事の大切さを教えて頂いた。

動物園での実習を経て、動物園における学芸職員の役割の多さ・必要性を実感した。動物の飼育という面だけでなく、動物と来園者双方の安全面、動物の特性や習性を如何に来園者に見せるべきか、という事を念頭に置きながら、それに併せて飼育員の動線なども配慮していかなければならない。更には感染症等のリスクを最小限に抑える・未然に防ぐ工夫が必要不可欠となる。

命ある生き物を資料として扱う事はとても難しく、そういった中で日々動物にとってより良い環境を模索・研究し続ける事の大切さを学べた実習であった。貴重な体験、貴重な話を聞かせていただいた事に感謝し、動物専門職として今回の実習を活かせるように努力していきたい。

堺市博物館 (大阪府 堺市)

実習期間：平成 28 年 8 月 3 日～ 8 月 7 日

薬学部 動物生命薬科学科

森 啓多佳

堺市博物館は、市制 90 周年記念事業として昭和 55(1980) 年に開館したが、市民の協力を得て開館したため「堺市立」ではなく「堺市博物館」という名称になっている。百舌鳥古墳群(特に大仙陵古墳—伝仁徳天皇陵—)を中心に堺市の歴史、美術、考古、民俗に関する博物館として、多くの資料を展示している。その他、生涯学習と市民文化の向上のため、講習会や出演者を募集して行うコンサートなども開催されている。

実習先に堺市博物館を選んだ理由は、実家が近く、同館を見学した際、あまりにも地元のことを知らなかったと痛感したのが大きい。そしてこの館での実

習は、堺というまちについてより深く知るチャンスでもあると考えたからだ。

実習生は 12 人いたが、私だけでなく全体を通していても学生同士の交流は少ないように見えた。実習内容を次の (表 1) にまとめた。

表 1

月 / 日 (曜日)	実習内容
8/3(水)	<ul style="list-style-type: none">・オリエンテーション・堺市博物館の事業、役割・展示場、施設見学
8/4(木)	<ul style="list-style-type: none">・博物館資料の管理と保存・展示企画の立て方・お茶室体験、美術工芸品の取り扱い
8/5(金)	<ul style="list-style-type: none">・世界無形文化遺産・古文書、歴史資料、考古資料の取り扱い
8/6(土)	<ul style="list-style-type: none">・古文書、歴史資料の取り扱いと整理
8/7(日)	<ul style="list-style-type: none">・学校教育との連携と体験学習・体験学習の準備・体験学習の補助およびボランティアとの意見交換

時間は 9 時 30 分集合で、約 1 時間ごとに 10 分休憩をとり、昼食は 12 時～13 時、解散が 16 時 30 分ごろであった。実習の形態は堺市博物館についての講義、お茶室体験や資料の取り扱いなどの体験があり、それぞれ担当の学芸員の方が講師をしてくださった。

座学の講義では大学の学芸員課程の授業で習ったことが多くあり、復習しながら各項目ごとに堺市博物館での取り組みを教わるという感じだった。印象に残っているのは「来館者を増やす取り組みとして博物館はどうしているのか」というところで、堺市博物館では無料ゾーンの設置やコンサートの開催だけでなく、市長自らがミュージアムディレクターとなり堺市博物館活性化戦略会議を設置し、積極的に博物館について考える場を作っているということである。

この他、実習で特に印象に残っていることを三つ紹介しようと思う。

一つ目は、8 月 4 日 (木) にお茶室で行った美術工芸品の取り扱いについてである。扱う工芸品はお茶碗で、本体の取り扱いと、お茶碗を包むごもつ袋、ごもつ袋を入れる箱の紐、そして箱を包む風呂敷の結び方を教わった。これは二人一組で互いにできているかを確認しながら練習し、担当の学芸員の方に合否を判定してもらうというゲーム形式で行った。

私たちの班は早くに合格をもらい、よりきれいに結ぶにはどうすればいいか考えたり、近くの班を教えたりもした。私は復習を兼ねて実習日記に簡単な図

を描いた(写真1)。

二つ目は、8月5日(金)～6日(土)にかけて行った古文書、歴史資料の取り扱いと整理である。5日の午後から6日の午前には明治以後の日本各地で売られていたと思われる各県(地方)の鳥瞰図が載っている絵はがきに県別(地方別)に整理番号をつけて、中性紙の封筒に入れる作業をし、さらに6日の午後は阪正臣という書道家が書いた手紙(封筒とはがき)を中性紙の封筒に入れ整理番号をつける作業をした。これらの作業は4人1組の班に分かれて行った。

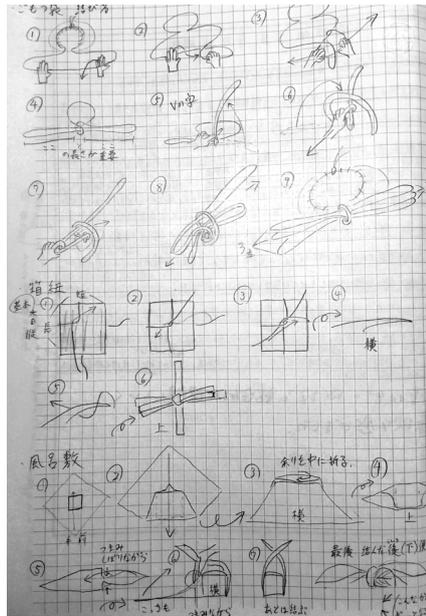


写真1: 実習日誌に書いた図

絵はがきの作業では、ほかの班の人がはがきとして使用されたものを見つけ、学芸員の方が読んだところ「今、私は〇〇(そのはがきの地方)で元気に過ごしています。あなたはいかが過ごされていますか。」のような感じのことが書かれており、当時どのように使われていたのか知ることができた。この資料(日本中―満州なども含まれていた―の絵はがき)はもともと個人の方が所有しており、ネットのオークションに出ていたところを学芸員の方が落札して手に入れたらしく、資料の入手経路としてそういったところもチェックしているのだと知った。

三つ目は、8月7日(日)に行った体験学習である。この体験学習は「ダンボールで仁徳天皇陵古墳を作ろう」というもので、定員が小中学生30人(申込受付先着順)とされている。まず参加者に堺市博物館内の展示場で伝仁徳天皇陵について簡単に説明し、その後ダンボールで同陵を作るという流れで行った。

簡単に作り方を説明すると、地面と平行の向きに仁徳陵を7段の等高線ごとに切った平面図の形に切り抜き、大きいものから順に台紙となる別のダンボールを重ねて貼っていくというものである。

体験学習の準備からはインターンシップの学生2人を加え2班に分かれて行った。一つの班は参加賞のキーホルダー作りで、もう一方の班は平面図の型紙作りで私はこちらを担当した。写真2で書いてある線すべてを切るというもので細い部分があり、きれいに切るのは難しかった。定員は小中学生となっていたが、来たのは小学校低学年～中学年が大半のように見え、「はたして、この子たちに切れるんやろうか?」と少し心配したものの、切り始めると意外とスムーズに切っており心配はいらなかった。

人数は30人いたが、学芸員の方数人とボランティアの方も10人近く来ており、親と一緒に来ている子もいた。14人いた学生は、1人～2人の参加者に就ききりで教えることもでき、注意散漫になることもなく安全に体験学習会の補助をこなすことができた。

この体験学習では参加した子供たちが学んだのはもちろんだが、私もたくさん学ぶことがあった。ボランティアの方との交流によってボランティアに興味が出たこと、子供への教え方や注意の仕方、そして終わってからの感謝の言葉が素直に嬉しかったことなどが挙げられる。

今回の博物館実習を通して、貴重な経験をしたことで、自分の視野を広げることができた。今後の生活でも、この経験を活かしていこうと考えている。

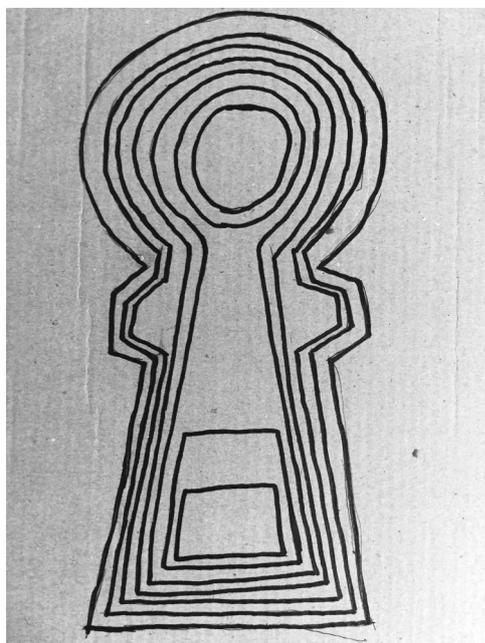


写真2: ダンボールに描いた線に沿って切り抜いて重ねていく